



ルー
テル

藤が丘だより

発行 月報委員会 発行日 2019年7月7日

No. 62

生きているのは、もはやわたしではありません。
キリストがわたしの内に生きておられるのです。
ガラテヤの信徒への手紙 2章20節



礼拝献花より

神と共に 人と共に

ルーター派キリスト教会 日本福音ルーテル藤が丘教会 牧師 佐藤和宏
〒227-0043 横浜市青葉区藤が丘 2-31-21 tel 045-973-2729/ fax 045-439-7009
URL:<https://www.jelc-fujigaoka.org/> mailto: fujigaoka@jelc.or.jp



シリーズ説教

『愛のまなざし』

牧師 佐藤和宏

ルカ7章36節～50節

先月の家庭集会では、マタイによる福音書5章の次の言葉から学びました。「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。」「天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」この日の家庭集会では、日本基督教団隠退教師の藤木正三先生の文章を通して、この箇所を耳を傾けました。藤木先生は、天の父の完全について語る同じ聖書の箇所「父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせる」とあることに触れ、「人は区別をしますが、天は覆うのです。それが『天の父の完全』というものであると指摘しています。そして、人間が区別してしまうことについて、「自分の物差しだけで相手を見て、区別してしまう」とし、その理由を「人間の目が一方的なものだから」と言っているのです。

確かに私たちは、自分の考えや経験、好みといった物差しで相手を見て、区別してしまうことがあります。相手のことを十分にわかってはいないにもかかわらず、自分の物差しで判断してしまうので、勝手に感情を害したり、肌合わないと感じたりしてしまっているのです。それが「一方的な目」ということに違いありません。福音の目録に登場したシモンのまなざしが、まさに「一方的な目」そのものであります。

藤木先生は続けて、そのような一方的な目について、それは「モノを見る目であり、ヒトを見る目ではない」と指摘しているのです。「モノを見る目」とは、「それが自分に役に立つかどうかで価値を決めつける目」であり、不要になれば新しい別なものを取り替えたり、処分したりする目であると言われているように、それは決して、人に向けられる目ではないことがわかります。それを人に向けるとしたら、「相手が自分に都合が良いかどうかで価値を決めつける目」ということになるでしょう。相手がモノであるならば、それは一方的に見ることも許されるのでしょ

うが、相手がヒトであるならば、それは許されないので。人は、「それぞれの立場や考えを持っていて、それに基づいて働きかけてくるもの」だからです。「ですから、ヒトに対しては一方的ではなく相互的に見なくてはなりません」と、藤木先生は指摘しています。ところが、「私たちの実際は」「モノを見るようにしかヒトを見ていない」のです。「ヒトを自分の物差しで決めつけながら、自分の意のままに扱おう」とし、「ヒトを人として受け入れていく相互的な目を持っていません」と、「致命的なまでに一方的な」私たちのまなざしについて明らかにしているのです。

そして最後に藤木先生は、次のように言われています。「『天の父が完全であられるように』と、私たちに求められている「完全」は、このヒトを見る目に関することです。それは、道徳的に完全なものになるというわけではありません。」「致命的なまでに一方的な目」しか持っていない私たちが、「相互的な目で持つて相手を見る」には、「天の父に自他共に見られていることに気づいて初めて開かれる」ことが不可欠であると

言われます。この天の父の完全に応じる完全とは、こういうことなのです。天の父が、私を一人の人としてそのまま受け入れてくださるように、相手も、私たちが自分の物差しでどれほど区別したとしても、怒りを持つたとしても、その相手も私も同じように天の父によって、そのまま受け入れられているという事実を知って、受け入れるということなのです。

「天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」とは、人が律法を徹底的に守ることによっても、道徳的に完全に正しくなることによっても成し遂げられるものではないのです。そうではなく、決して完全な者とはなり得ない私たちを完全な者とみなしてください。この天の父の完全は、主イエス・キリストの十字架によつて、私たちがどうすることもできない罪の赦しを実現し、完全ではない私たちが「完全」とみなしてください。」「自他共に見られている」とは、そのような主イエスの憐れみのまなざしの中に、私もあなたも置かれていることにほかならないのです。(聖霊降臨後第3主日)

講演会「ふしぎな一神教」に学ぶ

○田○郎

何度もくりかえし驚きを与えてくれるのが橋爪大三郎先生の著書であることに、多くの読者は同意されるに違いありません。九年前、藤が丘教会を離れ中国に赴任して数か月後に新聞広告で知ったのが「ふしぎなキリスト教」であり、中国駐在に疲れ果てた頃にまた新聞広告で知ったのが「驚きの中国」でした。どちらの本も出張者にすぐに買ってきてもらい、文字通り不思議に感じたり驚いたりしながら読み、いやそれ以上で、どちらの本も多くの不思議さと驚きが入り混じっていて静かな興奮に引き込まれるのでした。

【二つの一神教の確執について学ぶ】

私の愛読書の一つに千九百頁に及ぶ大著があつて、十字軍の放埒で狂暴な我欲の極から敬虔な他方の極へと揺れ動く描写にいつも心をとめます。今七回目の通読中ですが、今回は三つの一神教徒たちの穏やかだった共存をうかがわせる、さりげない記述が気にかかっています。アンダ

ルシアのコルドバ大学が学問の中心だった時代、イスラム教徒を介して欧州に逆輸入されたギリシャ哲学や薬学や化学を学びに、キリスト教徒（元教皇でさえも）がユダヤ人やイスラム教徒の教師のもとに集っていた事実です。年表で確認すると、ラテラン公会議でキリスト教徒とユダヤ人の交流が禁じられた時期や、枢機卿布告でアリストテレス研究が禁止された暗黒時代と微妙に前後します。キリスト教が実は三つの一神教のなかで最も偏狭になりうるのかもれないという自戒を抱いて、橋爪先生の講演を拝聴したのでした。

パリサイ派を偽善者のように描きユダヤ教を貶める表現が多々ある新約聖書、迫害のなかでも定めと考えるキリスト教に反感をもたないユダヤ教徒、イスラム教を偽預言者によるまやかしの宗教と呼ぶキリスト教コーランに三つの宗教は同じ神だとして書いていることをベースに二宗教に對して敵意をもたないイスラム教徒。このように整理されると、多くの疑問が氷解していきます。

30年ほど前、多くのイスラエル人と交流があつた時代、その一部なが

らルーテル教会に良い印象をもっていない人々がいたことを覚えています。ルターの言辭とその後世への影響に對する反発でしたが、そこには抑捺こそあれ憎悪もありませんでした。私はいまでも聖書を読むときに時々思うのですが、聖書はユダヤ人を中心とした物語、ユダヤ人以外にはローマ兵しか登場しないのなら「ユダヤ人は」でなく「人々は」とか「周囲にいた多くが」とか、後世に民族差別をうまないもつと柔らかな表現の方法が他にあつたのではないか……と。

つい最近まで、イスラム教徒が多数派であるインドネシアで三年間暮らしていましたが、イスラム教徒からのキリスト教批判を聴いたことがなく、キリスト教徒には逆にイスラム教を批判する人々が多くいたのでした。

それぞれの宗教が終末をどう考えているかについて講演を聴くうちに、それぞれの宗教が認め合つて平和に共存することは願ひながらも、終末などいざという場面に備えて普段から、私たちは二つの一神教を相手に、「何をすべきで何を避けなければいけ

ないか考えておかなければいけない」と、強く感じるようになりました。キリスト教徒には「ユダヤ人はユダヤ人のままで救われる」と考える人々も「全ユダヤ人がキリスト教に改宗して終末を迎える」と考える人々もいますし、イスラム教徒が「イエスの再臨を支持するが、そのときユダヤ教徒もキリスト教徒もイスラム教に改宗する」と信じていることを学ぶと、絶えざる紛争の火種が直観されるからです。

【通念との対峙について学ぶ】

自然法則に反して奇跡など起こるはずがないという一般通念に對して、「自然のルールに反することもできるが（神が）それもしないで自然法則



通りに事が起こることも奇跡、私が存在することも奇跡、目に映ることのすべてが奇跡」というように快適な反論をすることは、ほとんど私たちの存在意識「私たちがどのように存在しているのか」を揺さぶって意識改革をうながすこととなります。

また「創造を信じるなら復活を信じるのは簡単、私が滅んでも私が神と共に永遠にあるなら復活と同じではないか」という論理に説得力を感じます。「創造、復活、三位一体など一般通念にとつては合理的でない要素が、日本での布教の難しさの一端だ」と認識すると「普通の人に届く言葉でキリスト教をどう語ればよいのか」と考える力になります。

【ついでながらの感想】

日本はキリスト教徒にやさしくないとというのが私の長年の持論です。日曜日に招集されることが多いのが、自治会行事や、会社のゴルフ、研究会や団体の集会、音楽やスポーツのサークル活動などです。日本人信徒は、どちらに行こうか引き裂かれ、それが続くと心が疲弊してしまします。空気を読むことにたけた人々に囲まれ、神を語ると異様な眼でみ

れ、私たちは多神教的あるいは無神論的文化のストレスを生きています。一神教の国インドネシア(90%のイスラム教徒、8%のキリスト教徒)で心地よく暮らすことができ(上記の点でという意味ですが)、この日本にあるキリスト教徒独特のストレスを強く認識したのでした。

最後に自分の不知を恥しながら、かつ少々失礼ながら、橋爪先生がルーテル教会の信徒であられたことに驚いたのでした。まさに「ふしぎな一神教、驚きの橋爪先生」でした。著書を読んだ限りでは「大社会学者がなぜここまでキリスト教に深い関心と造詣を持つのか」と、心強い味方を外に得たような気持ちでおりました。学者として、学術的に中立的であらうという配慮がいきわたっているためだと理解しました。それはまた、広く一般の人々にバリアフリーでキリスト教の真実を浸透させるために、大切な配慮なのだを再認識したのでした。そして著書を読み返してみると、面白さがさらに増すようです。

講師の橋爪先生と企画に携わった皆さまのお働きに深く感謝しつつ。



今月の受洗記念日の皆さん

- 6日 ○田由○子姉
- 23日 ○野○子姉
- 25日 ○井○子姉、今○○子姉
- 30日 ○坂○美姉

おめでとうございます。



ホームカミングデー

6月2日、ルーテル藤が丘教会の第3回ホームカミングデーが行われました。特別礼拝では小副川牧師をお招きし、それに続く祝会は5名の来訪者の方々と28名の教会員の出席で、会場は明るい雰囲気になりました。

祝会は、全員集合の記念撮影からスタートし、女性会のちらし寿司や手作りのご馳走の並ぶテーブルを囲んで、遠路はるばるご来訪くださった方々の近況や教会員からのスピーチなど、美味しい食事に舌鼓を打ちながら、それぞれの今を知る交流を持つことができました。



喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。
ローマの信徒への手紙 12章15節
藤が丘教会ウェブサイト <https://www.jelc-fujigaoka.org/>
フェイスブックで礼拝のライブ中継をしています。(毎日曜日上午10時半)

早いもので今年で3回目のホームカミングデーとなりました。せっかくなような交流をもつことが出来たので、こ

からも何らかの形で続けたいという声を出席者の方々からいただいたいます。(○木○子)

